

## 紹介

京都市市政史編さん委員会編

### 『京都市政史 第四巻 資料』

#### 市政の形成

近代の京都市域を対象にしたこれまでの歴史研究は、ある偏りを持っていた。琵琶湖疏水事業など明治前期の諸事業、あるいはせいぜい明治末期の三大事業の頃までが政治行政史として扱われ、大正期以降は社会運動史の研究が中心であった。したがって、次第に都市の膨張を遂げていく大正期以降の京都市の政治・行政や都市開発がどのような展開を遂げていくかは、建築学などの分野を除けば十分な研究蓄積に乏しかった。「本書は、一八六八年から一九五〇年までの京都市政の歩みを、その背景となる社会の動向も含めて資料によってあとづけた」全体で八百頁にも及ぶ大部な資料集である。本書刊行の意義は、まず何よりも明治維新から戦後復興期までの京都市の政治・行政全体を数多くの資料を通して通観・検討できることにある。この点の意義

は実に大きい。第一次琵琶湖疏水事業にしても、三大事業にしても、その後の都市開発の流れと比較してその事業の持つ意味が明確になる。

本書の構成は次のようになる。まず、冒頭に会の代表である伊藤之雄氏による三十三頁の解説がある。次に資料集であるが、I市政の揺籃（第一章明治維新时期「一八六一―一八八九」、第二章市政誕生期「一八八九―一八九八」、III市政の定着（第一章三大事業期「一八九八―一九一八」、第二章市域拡大期「一九一八―一九三七」、第三章戦時体制期「一九三七―一九四五」、IV市政の再生（第一章復興期「一九四五―一九五〇）」、という時代により分別した三部構成から成る。ついで十七頁の資料解題、二十二頁の巻末資料がある。そして、各章とも、第一節は「市政の」概観」として市政の基本動向と制度の変遷、第二節は「市政の」しくみと環境」として、①組織編成、②区役所、③市民との関係、④周辺市町村との合併、⑤他の行政機関との関係、第三節は「京都市における」政策」として、①経済、②社会福祉、③環境衛生、④都市整備、⑤文教観光、という全く同じ

構成になる。これによって各時代の制度や政策の内容がわかり、全体として京都市政がどのように変遷していくかが明快に資料によって提示される。

伊藤氏の解説は、簡潔だが要を得ている。八十三年の長い時代の市政の変遷とその中の重要ポイントのおさえ方、政治勢力のおさえ方、他の大都市との比較の視座が貫かれている点は、これまで中央政治史で大きな業績をあげてきた氏ならではのものだろう。「従来、近代都市京都の形成に関して、明治からの第一疏水や三大事業のみが強調されてきたが、大正期の原敬内閣以降の都市改造事業ももっと重視されるべきであろう」という点も説得的である。また、戦後復興期の叙述にある京都市政における工業発展と観光振興との振幅の指摘も重要である。この振幅は、戦前期においても工業化の比重が高いと思われるが存在したと私は思う。ただ一点、瑣末なことだが、北垣国道市長（府知事）を「山県有朋に近づいていく藩閥官僚」というのは、『塵海』など北垣関係の資料を見る限り、貴族院議員時代はともかく、市長（府知事）時代は山県との関係はきわめて薄いように思われ

るので、誤解を招くのではないか。

また、本書全体、あるいは資料解題を読めば、京都市に關係したものは何でも集めようという意図で広範囲に資料が収集されたことがよくわかる。本書には、大野盛都日記とか田中宏家文書とか浜岡家文書など新出資料がかなりある。資料は、京都府会の關係文書やCAS文書の翻訳や東京市政調査会市政専門図書館所蔵資料までも及ぶ。ただ、私にとって面白かったのは、「日出新聞」(「京都日出新聞」)や「京都市會議事録(會議録)」などの中から重要部分を抜き出している部分である。この内容が良い。このような議事録などから重要事項を抽出するのはかなり手間がかかる。しかも、この抜き出し方は、決して長文にならないように配慮されている。この結果、限られた紙面の中で大量の資料を掲載することが可能になった。これは、執筆者および小林文広氏をはじめとした編さん委員会事務局の組織的かつ地道な作業の成果である。注もきわめて充実している。

介  
なお、欲を言えば、⑤文教觀光を、教育と文化・觀光に分けても良かったのではないか。実は、明治・大正期に意外に觀光の

資料が少ない感がした。そして、これが市政の実態を反映したものかもしれないとも思った。この点はどうなのか、今後編さんされる叙述編に注目してみたい。

伊藤氏をはじめとした執筆者の方々は中央政治史や他都市との比較に造詣の深い方々である。したがって叙述編になれば、京都市を全国的視座と他都市との比較で見ることにより近代都市の共通性を引き出すはずである。その上で、他都市とは異なる京都市政の特徴をどのように引き出すかも叙述編の注目される点である。私自身の印象では、道路の拡幅が明治末にずれこむように、行政が構想をたてても、なかなかその通りには進まない、学区廃止もうまくいかない、など一筋縄ではいかない都市の印象を京都市に持つ。このあたりをどう料理してくれるか、期待は尽きない。

(A5判 七四九頁 二〇〇三年三月  
京都市 六〇〇〇円)  
高久嶺之介 同志社大学人文科学研究所教授

## 受贈誌

(二〇〇三年七月二十八日)  
二〇〇三年九月二三日)

日本音楽史研究(上野学園日本音楽資料

室)四

史学(三田史学会)七二—一

史学雑誌(史学会)一一一—六

紀要 史学科(中央大学文学部)四四

史泉(関西大学史学・地理学会)九八

Anthropological Science (Japanese

Series) (Anthropological Society of

Nippon) 111-3

韓国史研究叢報(國史編纂委員会)一一二

岐阜経済大学論集(岐阜経済大学学会)三

六一—四

国立歴史民俗博物館研究報告(国立歴史民俗

博物館) 一〇〇

一橋研究(一橋研究編集委員会)二八—二

立命館文学(立命館大学人文学会)五八〇

国家学会雑誌(国家学会事務所)一一六—

七・八

経済論叢(京都大学経済学会)一七〇—

五・六

経済論叢(京都大学経済学会)一七一—一